

英文学にみる恋愛観(3)

——ピューリタニズムとロマンティシズムのはざま——

近藤正栄

愛の二元論

1 抑圧と抵抗

すでに見てきたように、ピューリタニズムは文明という枠組内で伝統を堅持する思想であり、ロマンティシズムはそれとは対立する反伝統の思想である。いいかえれば、ピューリタニズムは文明のもつ一方の全体目的の機能が他方の個体目的の機能を抑圧し、逆に個体目的の機能が全体目的の機能に対して抵抗するというのがロマンティシズムである。一方は権力であり、他方は反権力である。しかし、どちらの機能も一方が他方を完全に無視した形では成り立ちえないものなのである。われわれ人間はこうした両機能の中でしか生きられないようにできている。まさに人間とは文明内葛藤として生じる伝統と反伝統、権力と反権力、全体と個の緊張関係の中で生を営む存在なのである。

けっきょく、人間は相反する願望のアンビバレントな世界でしか生きられないのであるが、人間の自己充足の欲求という点では、人間は全体目的よりも個体目的を重視することになる。しかし個体目的はたえず全体目的の圧力下におかれるために、個体目的の自己充足への道も大幅に抑制されたものとならざるをえない。一方を立てれば他方が立たぬというこうしたアンビバレントな世界にわれわれは文明の原理、生活規範を見るのである。これは一方

では全体がその秩序維持のために個を規制し、他方ではその規制の代償として個が全体から恩恵を受けるという原理に基づくものである。

愛もまたアンビバレントな世界に属する。愛があるところには憎しみがあ
り、憎しみがあるところには愛がある。愛には憎しみが、憎しみに愛がそれ
ぞれ伴う。しかしそれでは、一方的に愛だけあって憎しみのない世界はない
のかと問われれば、ある、と答えなければならない。それはアンビバレント
な世界を超克する愛の昇華(sublimation)の原理によるものである。例えば、
宗教的に高められた愛の形態がそうである。神は愛なり、というときの愛と
か、慈愛の愛である。恋愛の形態でいえば、中世ロマンスに見られる宮廷恋
愛がその例となる。

情熱恋愛がそうであるように、愛の昇華による愛は現実性に乏しい。この
愛は全体と個というかかわりを超越した愛であり、愛の対象も地上的、現世
的なものではない。愛の昇華というのは、対象を愛の情熱そのものにおくこ
とから、愛を愛する愛ということになって、そこには愛と対立する概念の憎
しみなどの入り込む余地はないのである。トリスタンとイゾルデの愛がそう
であったし、ダンテのベアトリーチェへの愛もこの種の愛であった。どちら
の愛も手のとどかない愛であったからこそ、当事者はどのような苦悩にも耐
えられたのである。というより、苦悩そのものを愛する愛へと愛の昇華が行
なわれたのである。愛の昇華による愛は生も死も超越した不変の愛である。

昇華された愛は裏切ることのない愛である。自然愛の詩人は、自然を裏切
ることのない対象とみて、その愛にあこがれた。人間は昇華された愛にはか
ぎりないあこがれをもつ。われわれが学問、芸術などに知的、情熱的愛を捧
げるのもこのように昇華された愛、裏切ることのない愛ゆえにである。しか
し、われわれがここで関心をもつのは、対人間関係の愛、それも男女間の愛
である。

文明の進展状況によっては、個が全体の犠牲に供されるということも起
りうることである。そのためにとられる対抗手段としても、昇華への道が役
立つ。つまり、人間の自己充足の価値的転換である。人間の自己充足とは、
本来的にきわめて非社会的衝動に属するものであることから、これを野放し

にしておいたのでは、人間のエゴイズムが突出して手に負えなくなる。エゴイズムとは人間だけに見られる特徴であり、これはどこかの時点で抑圧されるべきものである。そうでなければ、人間はその置かれた環境世界との関係で孤立した存在となり、自滅せざるをえなくなる。フロイト流にいえば、エゴイズムの背景となるところは〈エス〉と〈超自我〉との間にはさまれた〈自我〉の領域に属するものである。自我が環境との相互作用の所産であるかぎり、自我の一人歩きということは考えられないはずなのだが、人間はそれほど器用にはできていないのである。だとすれば、エゴがエゴイズムにならないためにも、人間の自己充足の価値転換を求める昇華への道は重視されてよいのである。

昇華は代償と似ているが、代償の価値基準が高いところに設定されるのが昇華である。例えば、失恋した場合の愛情エネルギーの行くえに関していえば、そのエネルギーの方向性を見失わないためにも、昇華の原理は欠かせなくなる。そうでなければ、思わぬ悲劇的事態が生じかねなくなる。この場合、失恋による代償現象は愛情エネルギーの消極的な封じ込めとなるが、昇華現象はその積極的な解放となる。失恋による暴力的行為や自殺などは愛情エネルギーが封じ込められた結果生じる代償行為であるが、昇華の原理は失恋を人生の貴重な体験として受けとめ、失恋の失意に抵抗し、それを契機として再生への道に向けて発奮するというのがその内容である。

恋愛がロマン主義に属するものであれば、そこにはどのような抑圧に対してもそれをはねかえす抵抗のエネルギーはつきものである。恋愛における愛情エネルギーというのもこの種のエネルギーである。いいかえれば、愛情エネルギーも抵抗のエネルギーも同じロマン主義に根差すエネルギーなのである。愛情エネルギーはあらゆるものを美化しようとする性格をもっているが、それに対して外部から抑圧を加えようとするれば、すかさずそこに抵抗のエネルギーが発揮される。失恋とはこうしたエネルギーの喪失状態を意味しない。愛情エネルギーは一定の期間持続し、その期間は2、3年とされる。したがって失恋によって生じる愛情エネルギーの空転をさけるための手段は欠かせなくなる。

4 言語と文化論集 No.3

ロマン主義が抵抗の論理を内容とするかぎり、抵抗を試みて抵抗し切れなくなれば、その時点でロマン主義は破れ去るほかない。自殺は最大の抵抗の形式ともいえるが、これは敗北のロマン主義の行きつく先としかいいようのないものである。ロマン主義は倫理・道徳とか因習的固定観念などとはむすびつかない思想であることから、戦いを挑むこと、戦って破れそして死を選ぶことも、ロマン主義の側に立てば納得できるものである。これに対して抑圧と抵抗の妥協策として現実的な昇華の道に転ずるのはロマン主義の放棄というほかない。ロマン主義に徹すれば、たとえそれが自己破滅の空しい抵抗であっても、その抵抗の放棄は考えられない。

文芸批評の基準は二つに分かれる。一方はピューリタニズムの側、他方はロマン主義の側にそれぞれ立っていて、そのどちらをも満足させるような批評の基準は立てられない。今日的な方向では恋愛の形態はさまざまであり、必ずしも恋愛がロマン主義のものとはかぎらないが、それがロマン主義のものであれば、その評価はまずもってロマン主義の側に立って行なわれるべきものなのである。そうでなければ、評価に無用の混乱がおこる。

ロマン主義はその性格上さまざまな顔をもっている。二元対立の論理をひき起こすのもロマン主義である。ロマン主義には妥協の道はない。ロマン主義の愛ではロマン主義の二元論の影響を受けて、愛と憎しみとが同居せざるをえなくなる。愛の感情がつよまれば、それだけ憎しみの感情もつよまる。愛と憎しみとが切っても切れない関係に立つときは、ロマン主義が介入するときである。トリスタン物語におけるトリスタンとイゾルデはこの愛憎のはざままで引きつけられ、そして引き裂かれる。ロマン主義の愛にはこのくり返しがおこる。

愛と憎しみが交さすだけの内容が恋愛のすべてであれば、ことはおだやかに治まる。恋愛問題も複雑なものとならずにすむ。というのは、愛と憎しみには質的な性格の違いはほとんどないからである。いわば兄弟関係のものにすぎない。しかし、愛と憎しみの間に割り込んで入ってくるものがある。嫉妬である。嫉妬は憎しみとは性格を異にし、攻撃性をつよくもつ。愛情エネルギーの世界を混乱させるのはこの嫉妬の介入によるばあいがおおい。

愛情エネルギーはその目標が定まらないうちにはどのようにでもコントロールされうるものである。しかし一旦放出されたそのエネルギーは、それが自然の流れによって活力を失うのでないかぎり、その封じ込めは困難をきわめる。失恋も初期の段階では、愛情エネルギーはまだ活力に満ちている。しかし失恋はその活力ある愛情エネルギーにその目標を失わせることになる。そこに介入するのが嫉妬である。嫉妬は愛情エネルギーの目標を転換させ、それを支配する。これによって愛のロマン主義は憎悪のロマン主義へと転化し、相手への憎悪をつのらせ、その攻撃的性格をつよめる。攻撃のほこ先は相手とはかぎらない。自分自身のばあいもある。

オセロがイヤゴーにだまされて最愛の妻デズデモーナを絞め殺すのは嫉妬の攻撃性が結果したものであろうし、同様にギリシャ神話の金羊毛物語のイアソンは、妻メディアを裏切ったことで、彼女の怒りと嫉妬をかい、二人の息子が殺された。こうした嫉妬の攻撃性は攻撃的ロマン主義によるものといえることができるが、この種の攻撃的ロマン主義が自分自身に向けられたときは、自殺かそうでなければ、ジイドの『狭き門』のアリサのように現世的欲望からの逃避が行なわれる²⁾。

2 二元論世界の矛盾

文明人として人間が帰属を余儀なくされる文明の論理は、あくまでも二元論である。二元論の世界は力の論理が支配する世界であることから、相対立する二つの力はたえず衝突をひき起こさざるをえなくなる。力と力の衝突は混乱しか生み出さない。そこでその衝突をさけるために支配、被支配の論理が生まれる。一方が他方に従属、服従または帰属を要求する論理である。この支配と従属、服従の論理が文明のエネルギー源となって、文明内の階層的秩序、人間の帰属意識の連鎖が形成されるのである。

文明の秩序維持の担い手となる思想はピューリタニズムであり、これに抵抗する思想はロマンティズムである³⁾。文明は父権制社会を軸にして古代奴隷制社会、封建制社会そして資本主義社会を生み出した。二元対立の世界

では構造的に性差別が基本であり、男性は女性を支配し、女性は男性に服従するという差別主義が原理となる⁴⁾。服従と奉仕は文明が要求する帰属意識の発露であるが、家庭では妻が夫に服従するのは義務となる。こうした秩序維持が徹底される世界では、ピューリタニズムの思想がすべてであり、ここではロマン主義の思想の出番はないのである。

近代的な意味内容でいう恋愛はロマン主義に属するものであって、ピューリタニズムに属するものではないが、古代ギリシャではエロスの愛はこの逆で、ピューリタニズムに属するものであって、ロマン主義に属するものではなかった。男女の愛が成立するのはロマン主義の発動によるものであるということを考えれば、ギリシャでは男女の愛はおろか結婚愛さえもなかったことになる。エロスの愛がピューリタニズムに属するかぎり、その愛は異性愛とはむすびつかないのである⁵⁾。同性愛（ここでは少年愛）だけが最高の愛の形態であって、女は愛の対象とはならず、エロスの愛からははじき出されるのである。

女性は単なる快樂の道具として扱われていた当時においては、結婚は子どもをつくる必要性からのものであり、また経済的理由で仕事がわかち合えるからであった。結婚愛は生理学的目的と実生活の便宜上の目的に加えて、夫が妻の服従を要求することに還元されていて、家庭の秩序と社会の秩序に奉仕するという性格のものであった。妻は家庭外の仕事に関与することはなく、もっぱら家庭の管理、召使や奴隷の監督が仕事であった。愛には支配力があることから、エロスの愛は男性の側だけにかぎられていて、男性に帰属し服従する女性には愛は無用なものであった。

男女の性差別、女性蔑視の思想は文明の誕生以来のものであり、程度の差はあってもどのような文明においても見られるものである。社会の生産関係の歴史的発展に伴い、この差別主義は徐々に形骸化するものの、その本質は旧態依然たるものである。あらゆる差別からの解放は文明の歴史の終焉を待つほかないといえる。どのような思想も時代の産物であって、時代を無視した思想は単なるユートピア思想に終わる。プラトンによる女性蔑視の思想も当時の文明の価値基準がそうさせるのであって、プラトンから家庭愛、夫婦

愛などの思想は聞かれようはずもない。

古代ギリシャの世界は男女の性差別がもっともきびしい世界であり、愛とは支配可能な愛、奪う愛でしかない。一方的に支配が当然の世界では異性愛は存在しないのである。異性間に愛が存在しないとすれば、それは同性間だけのものとなる。同性愛である。プラトンの『饗宴』や『パイドロス』は同性愛の賛歌であった。古代の奴隷制社会では、ギリシャの都市国家にみられたように、例えばスパルタでは現実的に家庭愛、夫婦愛などは考えられず、妻は子を産むための機械にすぎなかったし、子どもは国家の所有物として早期に母親の手から引き離された。実現はしなかったとはいえ、プラトンの『理想国』にみられるユートピア思想もスパルタのものによく似ていた。家庭をもつことの禁止や婦人や子どもの国有化の思想とならんで、支配者、労働者、奴隷に分けられる身分も生まれついで宿命と考えられた。

女性は男性に服従するために宿命的に生まれついでいるというのであれば、男女の相互愛などは存在するはずもないのである。しかし、愛はなくても徳という概念は存在する。徳はそれぞれの階層に応じたものとして区別され、大きくは支配者層の徳と被支配者層の徳とに分けられる。女性は服従の徳にしたがえばよいということになる。支配者は被支配者に命令する徳だけを持ち、したがって支配者の被支配者への愛などは考えられない。被支配者は支配者の命令に服従さえすれば、それが美德となる。人は愛なしには生きられない存在であるとすれば、ここでは徳が愛にとって代わるのである。

エロスの愛はピューリタニズムの領域に属していて、反ピューリタニズムのロマン主義の領域のものではないが、これと帰属領域を同じくするものにアガペーの愛がある。両者はともにピューリタニズムの愛であり、一方は古代ギリシャ・ローマの時代に、他方はキリスト教時代にそれぞれ発現したものである。どちらもその愛の本質は禁欲主義である。

エロスもアガペーも聖と俗、精神的なものと肉体的なものとを分ける二元論の産物であることから、肉体の愛は蔑視され、精神的な愛だけが至高のものとする愛である。したがって、両者の愛はともに聖なるものであり、不純なものではなく、人間を清め、人間と神とを近づけるものである。むろん、

神概念は両者に相違があるが、どちらも聖なるものであることには変わりがない。

神と人間、精神と肉体をむすびつけるのがピューリタニズムの愛であれば、エロスもアガペーもともにその役割を担うことになる。しかし、エロスにとってもアガペーにとっても厄介なのは、二元論をとる関係で精神的なものだけを祭り上げて肉体的なものを蔑視するのでは、愛の形態がきわめて非現実的なものとはらざるをえなくなることである。肉体なしの精神は考えられないし、禁欲主義だけでは人間の存在そのものが否定される結果になるからである。俗なるものを無視して聖なるものだけを考えるのはこっけいでさえある。かといって、俗なるものと聖なるものを同次元で考えるのは二元論のとり立場ではない。

この点に関しては二元論は都合よくできていて、俗なるものを聖なるものに帰属させ、階層的に両者の統一をはかるのである。統一とは二元論の支配、被配の原理によって聖俗両側面を一つのものに総合するというのがそのはたらきである。この論理に立てば、肉体的な愛は一方では黙認可能となり、他方ではその浄化によって精神的な愛に高められるという思想の展開ができる。下位のものが上位のものに服従するのが美德であり、女性が男性に服従するのも美德となる。女性はその服従の義務をつよめることによって、信仰上劣るとされる女性の地位の向上もはかれる。古代社会からつづく結婚制度は女性に対する抑圧であり、女性を侮辱するものではあっても、こうした二元論の操作によってその不満や不平等性を昇華できるのである。

しかし、キリスト教文明のピューリタニズムは同じ二元論に立ちながらも、その統一の論理においてはプラトン主義ほどの大胆さにはいたらなかった。アガペーの愛はあくまでも上から与えられた愛であり、エロスの愛のように下からの愛の浄化作用によって獲得されるものではない。しかしどちらの愛であっても、それがピューリタニズムの領域のものであれば、その愛は支配、被支配の二元論の中で要求される絶対服従の愛には変わりがないのである。服従への要求にはその見返りが欠かせない。ここでの見返りは救いが原理となる。

救いの原理とは抑圧の原理を合法化するものである。けっきょく愛といい救いといい、そのどちらも奴隷制原理に基づいたものにほかならない。奴隷は生きるために抑圧の原理を受け入れざるをえないだけのことである。上位のものが下位のものに服従を要求する論理は奴隷制原理そのものである。この原理は父権制社会特有のものである。むろんこの論理はごまかしの論理であるが、これを正当化しなければ、文明の論理は成り立たないのである。

エロスは精神と肉体との健全な緊張関係を要求することで、アガペーほどのごまかしはないといえる。アガペーの論理では、肉体の愛と精神の愛とはむすびつけられない。これをむすびつけるには、ごまかしの論理をもってするほかない。カトリックの教義では都合よく結婚を秘蹟とすることで、肉体の愛は昇華されて神聖なものとなった。もしこのごまかしがなければ、アガペーの愛は絶望的禁欲主義となって宙に浮いたものとなる。むろん、これが秘蹟であるかぎり、夫婦愛に何らかの制約が生じてくるのはさけられないことになる⁶⁾。

アウグスティヌスはアガペーの扱いにおいては、ごまかしをさける方向でその矛盾の回避を考えた。新プラトン主義のもとにアガペーとエロスをむすびつけたのである。しかし、この二つはともに同じピューリタニズムに属するものではあっても、性格的な相違は歴然としている。その性格の相違の埋め合わせが妥協的手段によって可能なかどうかである。この妥協は有限と無限をむすびつけようとするのに似ていて、無理がある。無理といわれてもその無理を押し通さなければ、禁欲主義の教理からは解放されなくなる。当時の異端にマニ教とかグノーシス派があるが、彼らの教理はカトリックの教理とは相容れないにしても、禁欲主義の教理だけは伝統に固執した。のちの異端カトリ派もそうであったが、こうした硬直した二元論は実生活の上では、矛盾の露呈として浮き彫りにされるだけであった。中世末期の宗教改革期にプロテスタンティズムがアガペーとエロスの分離を試みたが成功しなかったのは、この矛盾を解消する教理が立てられなかったからである⁷⁾。

3 エロスの変容

われわれが文明という枠組に制約されて生きるかぎり、文明のもつ二元論の制約からは解放されない。恋愛は男女平等の地盤がなければ成立しない。二元論はその地盤の確立を拒否する。二元論の伝統の守り神はピューリタニズムであるが、これに対して挑戦するのが反伝統のロマン主義である。男女の恋愛はロマン主義の側に属する。したがって、文明と恋愛は互いに敵対関係に立たざるをえない。文明はロマン主義の愛を拒否して、代わりにピューリタニズムの愛、エロスやアガペーの性差別を前提にした愛を用意した。

中世のカトリシズムでは恋愛はご法度であったが、古代社会においても恋に現を抜かす男は社会の外に投げ出されるのが落ちであった。文明がまだ若い時代には、ロマン主義に属する恋愛という形式のものは存在せず、形は恋愛に似ていても、中味は男が女を奪うという略奪や誘拐そのものであったし、それ以外の愛は誇れるものではなかった。ローマ時代にアントニウスがクレオパトラとの愛の関係で悲劇の道に追い込まれたのは、彼がピューリタニズムの道から逸脱したからであった。

クレオパトラのエジプトは、エジプト文明の終焉期にすでにギリシャによって征服され、さらにローマによって征服されようとしている時期であった。いいかえれば、当時エジプトはギリシャ・ローマ文明の周辺、辺境の地であった。エジプトのように周辺文明と化した地域では、支配文明特有のピューリタニズムの影響もにぶってくる。アントニウスは、支配文明の中樞に位置づけられているかぎり、そのピューリタニズムの影響からはのがれられない、いわば宿命を背負っている。一方クレオパトラは、ピューリタニズムの束縛からのがれ出て、ロマン主義の世界に身を寄せても不思議はないのである。不思議なのは、ロマン主義の愛に溺れたアントニウスのほうである。

クレオパトラは、一方では文明の論理の圧力に屈し、ピューリタニズムの愛のえじきにされ、他方では放縦な愛に身をまかせた。しかしこれをもって、クレオパトラを妖婦扱いにするのは早計である。シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』にみられるようにクレオパトラはロマン主義の愛に生

きそして悲劇を迎えたが、アントニウスの悲劇は彼が属する文明の規範に服従しなかったことにある。彼にとって文明の規範に服従することは掟であり、義務であった。彼はその掟と義務に反してクレオパトラとの情熱的な愛に溺れた。その結果、彼は当然の報いを受けたといえる。アントニウスとクレオパトラは互いに帰属する世界を異にする。したがって、この二人を恋愛によってむすびつけることには無理がある。二人の悲劇は起こるべくして起こったものといえる。

アガペーの愛とエロスの愛はともにピューリタニズムの愛でありながら、文明の性格の相違によって両者は相容れない性格のものとして扱われる。キリスト教文明においては、自前の愛はアガペーの愛だけであり、エロスの愛は異教の愛としてしりぞけられる。アガペーとエロスの折衷が行なわれても、上位の愛はつねにアガペーであり、エロスはアガペーに服するものでしかない。けっきょく、キリスト教文明ではエロスは文明の愛としては不適切なものとなり、文明の伝統からはじめ出されて、反伝統のロマン主義の愛とならざるをえなくなる。つまり、ロマン主義の愛とは変容したエロスのことなのである。

ピューリタニズムの愛は奪う愛であり、ロマン主義の愛はその反対の服従の愛である。奪う愛はその裏面では服従の愛を要求するが、それはあくまでも命令的で強制によるものである。同じ服従の愛でも、ロマン主義の愛は自発的である。奪う愛は差別主義が前提であるが、服従の愛は反差別主義が原理である。

原罪の論理は、男女の主従関係を犯したことにあるとする聖書に根拠を求めたものである。エバ(女)はアダム(男)のためにつくられた存在であり、この原理に反する思想は神を冒瀆するものとなる。男女不平等の原理はパウロが認めるところであり、テルトゥリアヌス、ジェローム、アンブロシウスなどの教父たちもこれを認め、結婚愛、夫婦愛などは拒否された。童貞や処女が美德とされる社会環境では、結婚の積極的な意味などは認められようはずもなかった⁸⁾。まして男女の恋愛などは考えにも及ばなかった。

ピューリタニズムの禁欲主義は宗教的、倫理的目的によるものというより

は、政治的目的がねらいであった。ピューリタニズムの愛は奪う愛としかいえないものなものであり、差別主義を徹底させるためには禁欲主義は不可欠のものであった。禁欲主義は残酷な反自然主義を要求することから、ギリシャ時代においてそうであったようにその対極にある肉体的、官能的愛の快楽主義（ヘドニズム）を生み出す結果となるのは自明のことであった。しかし、快楽主義と禁欲主義は双生児の関係にあり、母体はピューリタニズムである。したがって、両者はともにロマン主義とは対立の関係にある。ただ、双生児の一方の快楽主義は二元論が作用して表面化することなく、闇から闇へと葬られるだけである。

快楽主義は地下にもぐる。カトリック教会はその権力をもってしてもこれを制御する力はなかった。快楽主義は宗教的規範に照らして罪に当たるのかどうか問われる。もし快楽主義が罪であるとすれば、ローマ教皇をはじめとする高位聖職者は、少数をのぞいてはほとんど地獄行きとなる。禁欲主義の影には快楽主義がつきまとう。影とは表面化しないですむものである。キリスト教における罪の観念はきわめて政治的に解釈されるために、禁欲主義の影の存在である快楽主義は罪とはならないのである。つまり快楽主義はピューリタニズムの敵ではないからである。罪とはピューリタニズムとは対立するロマン主義の不服従を対象にした汚名である。宗教はピューリタニズムに属することから、地下にもぐる禁欲主義の双生児、快楽主義を黙認すれば、宗教的ドグマの一貫性は保てる。

ロマン主義の愛へと変容したエロスはピューリタニズムの愛とは対立し、差別主義ではなく反差別主義の愛となった。しかしこの愛には、ピューリタニズムの禁欲主義の性格をそのまま継承するという側面があり、肉体愛や結婚愛への反発も生じてくる。ただ、これには注釈が必要である。ここでの禁欲主義はピューリタニズムが強要する禁欲主義とはちがって、自らの自発性によって選択したものであって、肉体愛や結婚愛が犠牲に供されることにはつながらないのである。

ロマン主義の愛は服従の愛であるが、不自然に人間の欲望を抑圧することには抵抗する。変容のエロスは相補性の愛であり、一方が他方を犠牲にする

アガペーの愛とは異なり、双方が自らの欲求にしたがって服従し合う愛である。ここでは官能的な愛、不純な肉欲の愛などと規定されるような性格のものも存在しない。愛の情熱に純、不純の区別をつけるのはアガペーの論理、いかえれば文明の論理がそうさせるだけである。むしろ、肉欲のための肉欲などは論外である。

愛の情熱によって男女双方が服従し合う相互愛はピューリタニズムの論理からは出てこないものである。変容のエロスが恋愛として公然と中世に登場してくるのは宮廷恋愛という形式においてである。宮廷恋愛は変容のエロスの形態をもつともよく表わしていて、エロスの同性愛的形式を異性愛にそのまま転じた形になる。禁欲主義的傾向もそのままである。当時、恋愛が禁制のきびしい歴史環境においては、宮廷詩人たちは愛の情熱を同性愛に求めざるをえなかったが、宮廷恋愛の公然たる出現は彼らにとっても好都合であった⁹⁾。しかしピューリタニズムの伝統的意識に固執するものにとっては、宮廷恋愛の出現を愛の墮落としてにがにがしく思ったとしても、それは抑えようのないものであった。また、いったん口火を切ったロマン主義の流れは宮廷内だけにとどまるものではなかった。変容のエロスのおかげで、中世末期にはロマン主義の反伝統のうねりは歴史環境を大きく転換させるまでにいたった。ロマン主義の登場は男女平等の意識を目ざめさせることにもなった¹⁰⁾。

4 服従の愛の受動性

伝統と反伝統との間に衝突が生じるのは、ルネサンス期以降近代においてである。伝統対反伝統の二元論は文明にはあらかじめ組み込まれているものであるが、伝統という意識が浮かび上ってくるのは、伝統のピューリタニズムに対する反伝統のロマン主義が活気を呈してきたからである。二元論の成立は相対するものを意識してのことであるが、一方が他方に対して支配を徹底しているときには、二元論は目立たずにすむ。伝統のピューリタニズムに対立する反伝統のロマン主義は、ピューリタニズムが圧倒的に優勢なときにはその出番がない。伝統対反伝統という形態の二元論は近代においてにわか

に突出してきたものである。

中世において芽生えたロマン主義の愛がきっかけとなって、ロマン主義の意識が高まり、近代においてロマン主義はようやくピューリタニズムと対立しうるものとなった。近代の歴史は伝統と反伝統との衝突の跡をのこして進展する。恋愛には障害がつきものであるが、その障害は伝統と反伝統の衝突を反映したものとなるばあいがおおい。

恋愛の価値は、どのような障害に出会ってもそれを乗り越えようとするところにある。障害が大きければ、それだけ恋愛の価値は高まるともいえる。しかしそれだけに危険性も高まる。悲劇の可能性もある。しかし愛とは何であれ、どのような愛もプロセスに意味があり、結果だけを問うものではない。恋愛においても、結果が喜劇に終わるか、悲劇に終わるかは問題としないのである。恋愛の評価は必然的に生じてくる障害をめぐってロマン主義的にどう対処するかにある。例えば、ともに悲劇に終わるアントニウスとクレオパトラにしてもロミオとジュリエットにしても、恋愛当事者がどのように障害と立ち向かい、それを乗り越えようとしたかが問われる。ただ、大恋愛の場合に生じる障害のほとんどは伝統への挑戦となるロマン主義的な障害である。無媒性も覚悟の上となる。

障害といえば、人生そのものが障害との戦いであるといえる。しかし、そのほとんどはロマン主義的な障害ではないはずである。近代的な恋愛においてはそうした無媒性は排除されるのがつねである。ピューリタニズムの伝統が支配的な世界では無媒な冒険は禁物である。しかし冒険をあえて求めるといのがロマン主義的な態度である。

トリスタンとイゾルデの情熱恋愛の形態は変容したエロスの原型として、愛の成就を妨げる徹底した障害の設定が行なわれる。情熱恋愛では障害は乗り越えられないようにできている。というより、一つの障害を乗り越えても別の障害が連鎖的に発生して、それが絶えることなくつづくという形になる。死という最大の障害からも解放されないというのが情熱恋愛の典型である。

恋の情熱には苦悩を伴うが、その苦悩を愛する情熱こそ恋の喜びの源泉、変わらない不死の情熱の媚薬である。恋の苦悩は時間・空間を超えた世界に

人を導く。人は老いて死ぬものである。だから、人は老いることを恐れる。しかし恋の苦悩には老いるという言葉はない。だから、恋愛にとって恋の苦悩こそすべてなのである。恋の苦悩を死を超えてまでもかぎりなく求めつづけるとというのが情熱恋愛である。人が恋の苦悩を求めるときは、肉体の老いや死は超越できる。

恋の歓びは時空を超えたところにある。人はそれを非現実的、空想的幻想だとしてまゆをしかめるかもしれない。たしかにロマン主義の世界は合理的にできていないといえるのかもしれない。それではピューリタニズムの世界はどうかである。ピューリタニズムの世界はすべて合理的にできているかといえば、否である。ロマン主義の世界よりもっと不合理でしかも錯覚的である場合がおおい。ロマン主義の世界のほうがより単純にできているというべきである。その典型例としてピューリタニズムに属する宗教の世界が上げられよう。

宗教は死後の世界をもっともらしく幻想的に見せてくれる。人はこれを幻想や錯覚だとも考えずに、ただひたすらに信じ込むだけである。ロマン主義者はこれを単なる幻想としてとらえ、伝統の圧力による不合理なものとして拒否し、これに背を向ける。ピューリタニズムの愛はあくまでも奪う愛、要求する愛であり、信仰さえも強要する。これとはちがって、ロマン主義の愛は愛の要求を拒否し、どのような愛であれそれが本物であると信ずれば、それに対して積極的に服従する愛である。宗教は死後の世界を設定してその信仰を要求するが、ロマン主義者は死後の世界があるというのなら、それをここに見せてくれと言ひ、神が存在するというのなら、神と一しょに食事をしたいと言う。こうした合理性がロマン主義的な服従の愛の精神である。

ダンテはベアトリーチェへの愛に触発されて『神曲』を書いた。彼が求めたものは服従の愛の追求である。この長詩は服従の愛を求めて地獄、煉獄そして天国への旅立をする物語である。彼のたどった道は変容のエロスの受動性にしがった自らの詩的体験の道であり、宗教の道ではなく、ロマン主義の愛の道である。この詩は死後の世界を美化しようとしたものではない。

死後の世界を美化して自殺に追い込む恋愛ロマンスはしばしば見られるの

であるが、自殺はロマン主義の本質とは相容れない異質の動機からのものである。おそらく、これはピューリタニズムの幻想によるものか、それとも変容のエロスの混乱によるものと考えられる。というのは、変容のエロスの原形はもともとピューリタニズムに属するものであり、その性格的痕跡はのこっているからである。いずれであれ、自殺は服従の愛からの逃避であり、結果は不名誉な裏切りのロマン主義とならざるをえない。

トリスタンとイゾルデ物語の終幕において、トリスタンは戦場で敵の毒槍を身に受けて重体に陥り、その傷をいやしうるたった一人のイゾルデに助けを求めるが、彼女の船は不幸にも暴風のために遅れ、彼の死に間に合わなかった。彼女は苦闘のはてに彼の遺骸に打ち重なって死んだ。いいかえれば自殺である。しかしここにみられる自殺的な死は裏切りのロマン主義とはむすびつくはずのないものである。むしろこうした死を求める愛は恋愛当事者双方の愛のきずなが強固であったことの証ともなる。

愛における裏切り行為は愛からの逃避であり、ロマン主義的な愛ならば、服従の愛の受動性を断ち切るものである。恋愛の形態がさまざまある中で、情熱恋愛にみる服従の愛の受動性は確固として不動のものである。こうしたロマン主義的な愛の受動性の典型は『トリスタンとイゾルデ』のほかに『ロミオとジュリエット』においても見られる。

『若きウェルテルの悩み』の主人公はロッテとの恋に破れて、自殺した。ロマン主義的な愛の形態では、恋に破れるというのは服従の愛からの転落を意味し、一方では裏切りの愛、他方では逃避の愛となって、愛の情熱そのものが破綻に追い込まれる。先にのべたように、失恋によって愛情エネルギーの転換が求められる場合は、その代償行為の道を選ぶか、それとも昇華の道を選ぶか、そのどちらかでしかない。ウェルテルは前者、それも自殺の道を選んだ。この種の自殺は裏切りのロマン主義の介入によって起こるものである。当時この例にならって失恋による自殺が美化され、自殺が流行したという。しかし裏切りのロマン主義はいいかえれば敗北のロマン主義であり、美化される対象とはならないものである。

服従の愛の受動性は死をも乗り越えるものである。失恋による無謀な死の

選択は、その愛の受動性がまだ未熟のものであったとしかいいようのないものである。ウェルテルを死に追いやったのは敗北のロマン主義の愛によるものであるが、この愛はねじれた愛であり、錯覚であり、空虚である。いいかえれば愛の挫折である。ウェルテルの自殺は愛の挫折がもたらす自己破滅の死である。

自殺の中でも心中は恋愛の当事者双方が死を選択することである。これも敗北のロマン主義の愛が結果するものである。心中物語はヨーロッパ文学の伝統にはなく、特殊な例外をのぞいては文学の領域からは締め出されるものである。自殺そのものが宗教上の理由でご法度となるからである。

心中の特殊な形態として考えられるのがアントニウスのクレオパトラの自殺である。人はだれでもピューリタニズムとロマンティシズムのはざまで生きることを強いられる。これは人間にとっての生活のいわば知恵であって、どちらか一方に片寄れば人間生活は立ちどころに窮屈なものとなる。しかし人は宿命的にその窮屈な生活を強いられるということもある。というよりそれが人間の生活規範なのである。その基盤となるのがピューリタニズムである。アントニウスはローマの武将としてきびしい制約を受けるが、もし彼がそこからの離脱をはかれば、彼は立ちどころに出口のない世界に投げ出されることになる。ローマの旧敵エジプトの女王クレオパトラが彼の救いの神となることなどは考えられない。生活規範としての背景がそれぞれ異なるアントニウスとクレオパトラの二人が政略的な関係を抜きにした恋愛関係に立つということ自体が不自然であり、その破綻は目に見えている。アントニウスが自らの生活規範を抜け出てロマン主義的な愛に生きようとするのは彼にとって許されざる無謀な選択、冒険というほかない。つまり、支配者であるアントニウスがロマン主義的な服従の愛に生きようとするのは不条理であり、当時の歴史環境がこれを許容するはずもないのである。彼はピューリタニズムの側からもロマンティシズムの側からも見離され、出口をふさがれた状態になる。これが彼が自殺にいたる原因である。クレオパトラは彼のあとを追うかのように自殺をとげるが、それは彼のものとは異なる敗北のロマン主義によるものである。

5 愛の認識の混乱

恋愛のエロスはピューリタニズムに属する原形的エロスをロマン主義の側に転化させたものである。そしてこれは不都合なく以後の世界に息づいている。しかしこれによって、愛には二種類のものであるという結果を招くことになった。一つは聖なる愛であり、他は俗なる愛である。これは愛の二元論である。エロスのロマン主義への転化は、以前には認められなかった男女の愛、恋愛を可能にした。

愛の二元論は互いに対立する二つの愛の設定となるが、愛の形態は発生的には一つのものであり、対立するようにみえる愛はもともと一つの愛から派生したものである。一つの愛であるべきものが二つに裂かれ、一方が他方を抑圧しつづけてきた。その犯人は文明の二元論である。ロマン主義の愛、変容のエロスが登場するまでは、一方の愛だけが認められ、他のロマン主義の愛は認められなかったのである。

ロマン主義の愛が日の目を見たおかげで、かつてなかったほどの愛への関心が高まってきた。しかし、愛の情熱の高まりと引き換えにわき起こってきたのが愛の認識の混乱であった。

文明の論理は聖なるものと俗なるものとを峻別する、聖俗二元論である。愛も聖俗二元論に組み込まれて、二つの愛が対立し合い、支配、被支配の関係ができ上る。愛とは根本的に聖なるものであるという考えもここから出てくる。聖なる愛はピューリタニズムに、俗なる愛はロマン主義にそれぞれ属するというのが愛の二元論である。聖と俗は渾然一体となっているという考えは文明論からは出てこないのである。差別主義の理念の出所もここにあり、一つのをわざわざ二つに分け、それを再び一つのものに統一しようとするのが文明の論理である。

ギリシャ的な二元論は、聖なるものと俗なるものとが対立関係に立つことを避け、俗なるものの延長線上に聖なるものを立てるという二元論である。したがって、聖なるものは俗なるものによって浮き彫りにされた形になる。愛は私ごとの愛から出発して無私の愛に高めるというのがその要領である。

この場合、私ごとの愛は、あくまでも無私の愛、聖なる愛の影の存在にすぎない。

キリスト教文明では、聖なるものと俗なるものとは当初から峻別されていて、下位の俗は絶対上位の聖に従属するというのが原理である。下位のものが上位のものに服するという階層的帰属思想もここから出てくる。聖権と俗権との争いがひき起こされるのは、絶対上位の聖権獲得をめぐる争いが原因である。政治的には、皇帝教皇主義とか教皇権至上主義などが出現するゆえんである。キリスト教文明もそれが対立した形では浮上せず、ピューリタニズムの聖なる愛だけがすべてであり、他の愛は無視された。ピューリタニズムの愛とロマン主義の愛とが対立した形で登場してくるのは、宮廷恋愛が出現するところからである。

愛の二元論は文明の論理からは当然の帰結であり、アガペーとエロスの対立が伝統と反伝統の対立を生み、結果としてピューリタニズムに対立するロマン主義が浮上してくるのも自然の流れであった。宮廷恋愛のころはまだロマン主義は芽を出したばかりであり、それがピューリタニズムの愛とは相容れない異質の愛かどうかの詮索もなかった。宮廷恋愛は公然たるものではあったが、それは宮廷というかぎられた特殊な階級文化の中での出来事であったからである。しかし中世末期に、そしてそれ以後において、ロマン主義の浮上と成長につれてこれまで罪とされていた反アガペーの愛、ロマン主義の愛が公然とまかり通るようになれば、愛の混乱は間違いなく起こってくる。

宮廷恋愛といっても、愛の二元論が表面化していないときには、その愛の形態がアガペーの愛とは異なる反アガペーの類型としてとらえられるはずもなかった。われわれは男女の愛を恋愛として他の愛とは区別するが、そうした区別は当時にはなかった。当時問題となったのは、愛と罪との関係で、伝統に照らしてその愛が罪となるかどうかであった。

情熱恋愛として類型化される宮廷恋愛が罪の烙印を押されなかったのは、その愛が反肉体的愛であったからである。それでは当時肉体的愛の関係はなかったのかというと、むしろそうではなかった。妄あるいは娼婦の存在が公

然たる事実であったように、肉欲を満足させるだけものは愛のうちに入らず、名誉なことではなかったものの、罪の対象になるものではなかった。トリスタンとイゾルデの場合、マルク王がモロアの森に身をかくした二人を殺そうとして忍び寄るが、二人の間に抜身の剣を横たえている寝姿を見て、わが心を恥じ、けっきょく二人を許すのは、二人の間に罪となる肉体的な愛が確認されなかったからである。

トリスタンとイゾルデの物語は伝説に基づくものであるが、このように肉体的情熱の抑制が美化される背景には、当時の歴史的現実としてそれなりの理由があったものといわなければならない。教会の裏面史として挙げられる聖職界の倫理的墮落がある。聖職界では罪とならずにすむ肉欲がまかり通った。修道士と修道女との密通、不義を犯す者、同性愛などである。司祭を司教に叙任するときには、童貞であることが前提であった。にもかかわらず、司祭は妻帯するか、愛人をもっていた。聖職者の結婚、同棲を禁止し、違反者を破門すると定めたのは、教皇グレゴリウス七世(在位1073~1085)であった。この時期に多数の聖職者が罷免された。しかし以後、聖職者の肉体的な愛は地下にもぐらざるをえなかった。トリスタンとイゾルデの物語はこうした時代背景と倫理観をにらんでのものであったと思われる。

宮廷恋愛は肉体的情熱の愛を排した恋愛形式の情熱恋愛であるが、疑問視されるのは、情熱恋愛と肉体的情熱とはむすびつくことはなかったのかどうかである。残念ながら、これは文学としては文献に現われてこないのである。これは結婚愛においてさえも肉体的情熱の入り込むすきを与えないピューリタニズムの影響によるものと思われる。情熱恋愛は愛すること自体が幸せであるが、肉体的情熱の愛は愛することによって幸せをつかむのが目的である。しかしこの両者を峻別して考えるのはきわめて困難であろう。

こうした状況下で肉体的情熱の愛の賛歌としてたった一つ残されているのが、歴史上の人物アベラールとエロイズの愛の書簡である。アベラール(Pierre Abélard, 1079~1142)はフランスのスコラ哲学者・神学者で39歳のとき、17歳の才媛エロイズと肉体的情熱の愛に燃え、事実上結婚生活をし、子どもさえももうけたが、のちに二人は引き離され、それぞれ修道院に入る

身となった。書簡はそのときに書かれたものである。

アベラールとエロイズの愛は服従の愛、変容のエロスの形態をとるものであったといえるが、それはのちの時代にみられるような完全なロマン主義的情熱として位置づけられるものではなかった。というより、ピューリタニズムの圧力がそれを打ち消したものと見られる。カトリシズムが全般的に浸透している中世の一般社会においては、ロマン主義的傾向の愛などは蔑視の対象にこそなれ、社会の表面に浮かび上ってくる余地などはなかった。二人の愛もその例にもれることはなかった。二人が結婚していたという事実もみ消され、エロイズは女修道院長にさえなった。もし書簡が残されなかったら、二人の存在は永遠に歴史からかき消されていたことになる。

エロイズは書簡の中で罪について言及し、彼女がたどった愛の行為が罪だというならば、その罪のほうを愛するとさえ彼女は言い切る。しかも彼女はそれを罪とは認識していない。彼女が苦しんだのは、罪を犯したからではなく、罪を犯すことがもはや不可能になったことであった。

恋愛が禁制の伝統の圧力下にあっても、伝統の守り神であるピューリタニズムの愛の範囲内であれば、たとえそれが恋愛形式のものであっても罪には問われず、そこから一步出た愛の形式は罪を犯したことになる。エロイズはこれに抵抗して反逆のロマン主義に走った。しかし、アベラールはこれにはついていけなかった。二人の服従の愛の実践は長くはつづかなかった。当時、一般にはロマン主義の愛は芽生えこそすれ、その実践からは遠いものであった。ロマン主義の愛が市民権をもつのは、それがピューリタニズムの愛と対立しうるものとなってからのことである。

(注)

- 1) 科学的な証明によれば、恋に落ちると脳内にフェニルエチルアミンという物質が分泌される。それが抵抗力を失うまでの有効期間は2、3年といわれる。ちなみにトリストラン物語に出てくる恋の媚薬の有効期限は3年間とされる。
- 2) アリサのとする現世的欲望からの逃避は、失恋による恋愛恐怖症に似ていて、精神的外傷(トラウマ)を伴う情動の放棄といわざるえない。アリサがそうであったようにこのままでは救いのない世界が待ち受けているだけということになる。

- 3) ピューリタニズムもロマンティシズムもともに二元論の思想をとるが、前者は文明の論理としての二元論、支配、被支配を軸にした上から下への力の論理が前提であり、後者はそうした伝統の論理とは対立する下から上への抵抗の論理が基本である。
- 4) 女性は服従すべき劣った存在だと主張したのはパウロだが、カルヴィンもこの考えから抜け切れていなかった。
- 5) 文明の論理にしたがえば、思想はピューリタニズムがすべてであり、それと対立する思想、ロマンティシズムは拒否される。したがって、思想は一元化され、愛の観念も一元化される。愛の観念の二元化は文明が近代化に傾斜したときの産物となる。思想の一元化は文明の二元論にしたがったものである。
- 6) 教会は夫婦の性生活までも規定した。肉体愛の規制である。肉体愛は神を冒瀆するものとなるからである。夫婦の肉的感動なき性交も真面目に考えた。近代のプロテスタンティズムにおいてもこれは例外ではなかった。裸体をタブー視したのは17世紀のピューリタン革命以後だが、ピューリタンは下着を第二の貞操と考え、交情においても裸体は禁じられた。これは19世紀までつづくが、裸体の恥を教えたのは近代のキリスト教である。ルーヴル美術館では裸体画は未青年には禁じられた。
- 7) エロスとアガペーの分離が不可能であっても、ルネサンス期には新プラトン主義の命題を受けて、この世ではエロスの愛は敗れるがあの世では勝利するという形で一応の決着がつけられた。
- 8) パウロは結婚については「自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないため」(コリント前書7の5)と前置きし、「もし自制することができなければ結婚しなさい。情の燃えるよりは結婚するほうがよいからです。」(同7の9)と結婚の消極性を説く。
- 9) 宮廷詩人のトルバドゥールが城から城への流浪の生活をやめた後、同一の城に安住し、男たちが狩や武芸にはげんでいる間、ひまをもてあましている貴婦人に情熱的な愛の詩をうたい、自分自身も情熱的な恋を捧げることができた。
- 10) 男女平等の観念はピューリタニズムの伝統からは出てこないものであるが、その主張は信仰上の男女の平等性からはじまった。